

不破家華岡流手術記録の検討

山内一信、不破^{*} 洋

一、はじめに

華岡青洲は手術手技を『華岡家治験図』などに見事に記録させている。多くの門人達もその手技をまねて記録を著していると思われるが⁽¹⁾、実際にその手術記録が残されているのは少ないようである。華岡青洲の高弟の一人であった三嶋良策⁽²⁾（後に不破為信^{イシノベ}則明（廉齋）と改む）、およびその嗣子不破為信惟治（杏齋）は美濃中島郡不破一色村にて華岡流の手術を行ない、手術記録を残した。本研究ではその記録を分析し、当時の医療内容を検討するものである。

一、不破為信父子について

三嶋良策は美濃中島郡不破一色村に住居する医師で、家は曾祖父の代より医業を専らとした。良策は文政六年（一八二三）十一月朔から文政八年十月頃にかけて華岡青洲塾春林軒に入門し⁽²⁾、青洲の手技手法を会得した。不破一色村に帰村後は三嶋為信と名乗り、嘉永二年からは不破為信と称した。不破家には青洲画像（文政八年乙酉春三月）や、青洲筆の書軸などが伝わっている。その嗣子の為信惟治（杏齋）は文政十二年（一八二九）十二月七日為信（廉齋）の長男として生まれ、嘉永三年（一八五〇）二月から嘉永五年（一八五二）十二月まで青洲の高弟、高階丹後介経宣に入門し、これまた華岡流

の外科手術を得意とした。安政六年（一八五九）四月に父の跡を継ぎ、明治三十二年五月十三日（六十九歳）に没している（表1）。三嶋良策が春林軒を去った時期は定かでないが、同門の小川寿仙（伊予の国の医師、文政六年十一月六日入門²）と熊野に旅行したときの日記『熊野道中雜記』が残されていて、これによると文政八年九月十日に華岡塾を出発し、同年十月十四日に帰塾したとあるので、この時点までは入塾していたことがわかる。

表 1 不破為信則明廉齋および不破為信惟治杏齋に関する年表

西 曆	和 曆	事 項
一八〇四	文化元年	*十月十三日 華岡青洲初めて乳癌を摘出
一八二三	文政 六	十一月朔 三嶋良策（三嶋為信則明廉齋）青洲春林軒に入門
一八二五	文政 八	九月十日～九月十四日にかけて廉齋、「熊野道中記」を記す 十月頃 廉齋不破一色村に帰郷
一八二九	文政十二	十二月七日 杏齋（不破為信惟治杏齋）生まれる
一八三二	天保 三	十二月二十九日 廉齋父廸翁歿（六十三歳）
一八三五	天保 六	*十月二日 青洲歿
一八四九	嘉永 二	三島姓から不破姓に戻る
一八五〇	嘉永 三	九月廉齋次男周治尾張知多郡亀崎村医師問崎家に養子八代当主
一八五二	嘉永 五	二月杏齋、京都木屋町高階丹後介経宣に入門
一八五九	安政 六	十二月 杏齋不破一色村に帰郷
一八六〇	萬延 元	四月 廉齋医業を退く
一八六一	文久 元	八月十四日 廉齋歿（五十六歳） 十月 杏齋和宮御降嫁に際し、笠松郡代の命をうけ医官として 美濃・合渡に出向き警固にあたる
一八九九	明治三十二	五月十三日 杏齋歿（六十九歳）

三、資料について

不破家に残された手術図資料は九十五枚で、これを患者の名前、居住州、郡、年齢、性別、罹病期間、病名、手術年月日、術者名別に表2に表わした。十五番の症例を図1に示す。記載のみられない項目は空白にしてある。一番から八番と、十番の症例には術者名が記載されていないが、為信廉齋の帰村年月日から推測して同者の手術であることは間違いない。家史によれば為信廉齋は安政六年（一八五九）四月に医業を退いているが（表2）、表2の手術番号三十八および三十九番の症例は廉齋と杏齋と両者が記載している。表には杏齋の所見を記した。従つて表の三十八番以降が息子の為信惟治（杏齋）による記録である。手術番号七十の術者間崎周治は為信惟治の実弟であり、尾張知多郡亀崎村の医師間崎家に嘉永二年九月に養子となつてゐる。⁽¹⁾

四、結 果

四―一 患者の概要

再手術や再々手術を除く全症例数は八十六例で、年齢は十一歳から六十八歳（平均年齢四十二歳）まで幅広く分布し、男十三例、女七十三例と圧倒的に女が多かつた。患者の居住地は美濃四十八例、尾張三十一例、東濃一例、三河一例、飛驒一例、伊勢一例、近江一例と美濃（五十六パーセント）および尾張（三十六パーセント）で九十二パーセントを占めたが、遠くは飛驒、伊勢、近江の国からの受診者もあり、為信の名は濃州を中心として、近隣の国まで広く知れわたつていたことが窺われる。出自別には武家が四例、岐阜や大垣、一宮などの町からの受診者が七例、他のほとんどは村からの受診者であつた。

四―二 疾患について

表 2 不破家華岡流手術記録

(その一)

手術 症例 番号 番号	名 前	国 郡	村または町	年齢 性	罹病期間 (年)	病 名	左右	腫瘍重さ (銭)	転移	手術年月日			術者名
										西暦	和暦	月 日	
1 1	八右衛門母	尾	下奈良	64 女	3	乳癌		32		1826 文政 9 3	20		
2 2	新衛の寡婦	濃 (大垣)	新街	50 女	3	乳癌		40		1827 文政10 4			
3 3	雄吉	濃	豊啄	40 男	20	肉瘤		200		1828 文政11 6	2		
4 4	大右衛門妻	濃	牧	36 女		乳癌		60		1829 文政12 6			
5 5	庄藏	濃	海松	60 男	40	上唇肉瘤		5		1830 文政13 7 31			
6 6	吉左衛門	尾	羽栗 小牧	20 女	3	乳癌	右	14		1830 文政13 10 14			
7 7	彦藏娘		小牧	21 女	6	乳癌	右	12		1830 文政13 10 16			
8 8	庄右衛門妻	尾	犬山之西 山名	女		乳癌		20		1831 天保 2 6			
9 9	儀兵衛妻	尾	丹羽 山名	48 女		乳癌	左			1839 天保10 3 29		三嶋為信	
10 10	絹屋定八妻	尾	割田	49 女	5	乳癌				1839 天保10 5			
11 11	大黒屋久兵衛妻	尾 (大山)	魚屋町	52 女		乳癌	右	20		1839 天保10 10 11		三嶋為信	
12 12	彦右衛門妻	濃	中島 摂津須賀	45 女		乳癌	右	63 匁		1839 天保10 11 16		三嶋為信	
13 13	為八妻	尾	羽栗 雷堀村	40 女		乳癌	左	30		1841 天保12 10 12		三嶋為信	
14 14	惣兵衛妻	濃	下大浦	40 女	3	乳癌	右	13.5		1845 弘化 2 4 19		三嶋為信	
15 15	森田屋妻	東濃	岩村	38 女	10	乳癌(1)	右	180		1847 弘化 4 2 13		三嶋為信	
16 16	勘右衛門妻	尾	杉田	45 女	4	乳癌	左	5		1848 弘化 5 2 28		三嶋為信	
17 17	綿屋喜助妻	尾 (一宮)	下馬町	48 女	7	乳癌	左	70		1848 弘化 5 3		三嶋為信	
18 15	森田屋季吉妻	東濃 惠那	岩村中街	女	10	乳癌(2)	右	13	腋(10)	1848 嘉永 1 夏 2		三嶋為信	
19 18	庄三郎母	濃	本巢 別荷	49 女	5	乳癌	右	15		1850 嘉永 3 1 25		不破為信	
20 19	勘右衛門妻	尾	妙光寺	49 女	4	乳癌	左	12.2	腋(+)	1851 嘉永 4 3 6		不破為信	
21 20	治左衛門母	尾	丹羽 下奈良	53 女	5	乳癌	右	10.5		1851 嘉永 4 3 11		不破為信	
22 21	何某母	濃	押越	66 女	年来	乳癌	右	10	腋(2)	1854 嘉永 7 春 1		不破為信	
23 22	甚右衛門母	尾	中島 馬引	62 女		乳癌	左	100		1854 嘉永 7 9 25		不破為信	
24 23	治兵衛娘	濃	羽栗 北及	15 女		乳癌	右	32		1855 安政 2 12 10		不破為信	
25 24	勝左衛門母	尾	王ノ井	50 女	2	下顔膿血				1857 安政 4 5 上旬		不破柏斎	
26 28	菊右衛門妻	濃	西ノ庄	54 女	2	下唇膿血				1857 安政 4 〇中旬			
27 26	大島五平妻	濃	加納藩	40 女	3	乳癌	左	18		1857 安政 4 5 9		不破柏斎	
28 27	幸藏姉	濃	小熊	50 女	3	乳癌	右	18	腋(2)	1857 安政 4 8 28			
29 28	善右衛門	尾	中島 梅宮	50 男		額肉瘤	右			1857 安政 4 9 上旬		不破為信	
30 29	名倉〇〇寡婦	濃	羽栗 本郷	50 女		乳癌	左	25		1857 安政 4 10 3		不破柏斎	
31 30	模高屋平左衛門妻	尾	稲葉宿	46 女		乳癌	右	15	腋(7)	1858 安政 5 5 29		不破為信	
32 31	浪右衛門	濃	北及	40 男	積年	腸痔				1858 安政 5 6 下旬		不破為信	
33 32	泰妙尼	尾	中島 嶋	30 女	5	乳癌	右	5.5		1858 安政 5 8 13		不破為信	
34 33	彦右衛門妻	尾	海東 馬島	48 女	4	乳癌	右	40	腋(10)	1858 安政 5 8 14		不破為信	
35 34	安藤二郎右衛門妻	濃 (岐阜)	車ノ町	29 女	10	乳癌	右	15	腋(13)	1858 安政 5 11 5		不破為信	
36 35	善右衛門妻	濃	厚見 西鶴	51 女		乳癌	右	20	腋(5)	1859 安政 6 5 1		不破為信	
37 36	栄藏娘	尾	中島 野郎	15 女		乳癌	右	8		1859 安政 6 5 11		不破為信	
38 37	三玄寺庵主玄峯	三 加茂	萩野平	40 女	5	乳癌(1*)		19		1860 万延 1 8 9		不破為信惟治	
39 38	笹屋専二良妻	濃	笠松	36 女	3	乳癌	左	25	腋(27)	1860 万延 1 9 4		不破為信	
40 39	常左衛門	尾	稲葉	51 男	5	下腿肉瘤		78		1860 万延 1 9 27		不破為信	
41 37	三玄寺尼僧玄峰	三 加茂	萩之平	女	3	乳癌(2*)		20		1861 文久 1 3 20		不破為信	
42 40	虎吉姉	濃	輪之内 中郷	26 女	22	顔面肉瘤		300		1861 文久 1 7		不破為信	
43 41	安浄寺妻	尾	中島 小信	36 女	12	頭部肉瘤		50		1862 文久 2 3 2		不破為信	
44 42	忠兵衛	濃	大浦	26 男	11	頭部肉瘤		27		1862 文久 2 6		不破為信	
45 43	興兵衛妻	濃	厚見 瓜村	30 女	2	乳癌	左	20		1862 文久 2 8 5		不破為信	
46 44	六兵衛妻	濃	安八 森辺	59 女	5	乳癌	左	80		1863 文久 3 2 2		不破為信惟治	
47 45	多岐屋清六妻	濃	大垣 伝馬町	46 女	3	乳癌(1*)		40		1863 文久 3 3 3		不破為信惟治	
48 46	和七妻	尾	中島 法立	53 女	3	乳癌(1*)	左	25	腋(20)	1863 文久 3 7 23		不破為信	
49 47	興左衛門娘	濃	厚見 御茶屋	23 女	3	頭部肉瘤		20		1863 文久 3 8 4		不破為信	
50 46	和七妻	尾	中島 法立	54 女	4	乳癌(2*)		25		1864 文久 4 1		不破為信	

手術 症例 番号	名前	国	郡	村または町	年齢	性	罹病期間 (年)	病名	左右	腫瘍重さ (銭)	転移	手術年月日			術者名		
												西暦	和暦	月日			
51	48 繁藏妻	尾	羽栗	江森	49	女	3	乳癌(1 ⁺)	左	40	腋(21)	1864	文久	4	1	27	不破為信
52	48 繁藏妻	尾	羽栗	江森	49	女	3	乳癌(2 ⁻)	左	35		1864	文久	4	4	○	不破為信
53	49 藤四郎妻	濃	厚見	東鶴	23	女	2	乳癌		30		1864	文久	4	4	1	不破為信
54	50 仲左衛門妻	江	坂田	間田	41	女	10?	陰門瘤				1864	文久	4	4	6	不破為信惟治
55	46 和七妻	尾	中島	法立		女		乳癌(3 ⁺)		20		1864	文久	4	4	15	不破為信
56	51 藤吉妻	濃	安八	内野	50	女	3	乳癌		28		1864	文久	4	5	2	不破為信
57	52 山田市兵衛妻	濃	無芸	谷口	57	女	3	乳癌	左	30	腋(?)	1864	元治	1	9	23	不破為信
58	53 為右衛門息子	飛	益田	中岳	12	男		鉄管				1865	慶応	1	2	2	不破為信
59	54 小栗多良兵衛妻	尾	知多	半田	41	女	3	乳癌(1 ⁺)	左	45		1865	慶応	1	4	6	不破為信
60	55 水谷○一郎母	尾	尾張藩		45	女	5	乳癌	右	98		1865	慶応	1	4	7	不破為信
61	56 福満寺娘	濃		福東	18	女	2	頸部肉瘤	左	21		1865	慶応	1	5	25	不破為信
62	57 甚助娘	濃		松ノ木	18	女	2	乳癌	左	27		1865	慶応	1	8	28	不破為信
63	58 富右衛門妻	濃		飯納	39	女	4	乳癌	左	15	腋(18)	1865	慶応	1	9	11	不破為信
64	59 善右衛門見	濃	安八	水取		男		鉄管				1866	慶応	2	3	11	不破為信
65	60 平左衛門妻	濃	厚見	日野	45	女	3	乳癌(1 ⁺)	右	25	腋(15)	1866	慶応	2	3	14	不破為信
66	61 棚橋唯右衛門見	濃		古橋		男		鉄管				1866	慶応	2	3	15	不破為信
67	64 多岐屋清六妻	濃	(大垣)	伝馬町	48	女		乳癌(2 ⁻)	右	32	腋(?)	1866	慶応	2	3	23	不破為信
68	62 野田文之右衛門娘	濃	(岐阜)	上新町	15	女	3	頸部瘤	右			1866	慶応	2	3	24	不破為信
69	63 九平次母	濃	安八	今尾	68	女	4	乳癌	右	45		1866	慶応	2	4	22	不破為信
70	64 中右衛門妻	尾	知多	成岩	30	女	数	乳癌	左	20		1866	慶応	2	6	4	間崎周治正恭
71	65 末藏妻	濃		伏屋	39	女	3	乳癌	左	27	腋(12)	1866	慶応	2	6	17	不破為信
72	66 柳右衛門妻	尾	海東	水江新田	50	女	4	乳癌	右	50	腋(20)	1866	慶応	2	6	○	不破為信
73	67 善六妻	勢	朝明	小向	49	女	数	乳癌	左	90		1866	慶応	2	7	6	不破為信
74	68 和平妻	濃	厚見	本庄中村	24	女	年来	乳癌	左	30		1866	慶応	2	7	16	不破為信
75	69 甚六妻	濃	厚見	本庄中村	24	女	2	乳癌	右	25		1866	慶応	2	7	20	不破為信
76	70 勘左衛門	濃	安八	南今ヶ淵	50	男	2	足脱疽	両			1866	慶応	2	7	22	不破為信
77	71 興三右衛門	尾		馬引	2?	男	年来	麻瘋				1866	慶応	2	8	26	不破為信
78	72 茂右衛門妻	尾	中島	西萩原	54	女	3	乳癌	右	45	腋(?)	1866	慶応	2	12	1	不破為信惟治
79	60 平左衛門妻	濃	厚見	日野	46	女		乳癌(2 ⁻)	右	48		1867	慶応	3	1	16	不破為信
80	73 光明寺堂	尾	知多	大野	51	女	5	乳癌	右	56	腋(?)	1867	慶応	3	2	22	不破為信惟治
81	74 後藤捨太郎	濃	大垣藩		35	男	3	足骨疽	右			1867	慶応	3	2	29	不破為信惟治
82	75 遼右衛門妻	濃	可児	澤渡	56	女	10	乳癌	左	45		1867	慶応	3	3	7	不破為信惟治
83	76 国邊利助妻	濃	加納藩		53	女	5	乳癌	左	50		1867	慶応	3	3	8	不破為信
84	77 小兵衛息子	濃	海西	松木	11	男	3	眼瞼肉瘤	右	15		1867	慶応	3	5	1	不破為信
85	78 栗田右三郎母	濃	不破	粟原	53	女	3	乳癌	右	39		1867	慶応	3	5	2	不破為信
86	79 大工栄助妻	濃	郡上	八幡	56	女	6	乳癌	右	45		1867	慶応	3	5	6	不破為信
87	80 三間屋嘉兵衛妻	濃	(岐阜)	下竹屋町	50	女	3	乳癌	右	37		1867	慶応	3	5	12	不破為信
88	81 伊之助妻	濃	厚見	柳津	41	女	10	乳癌	右	50		1867	慶応	3	6	2	不破為信
89	82 源右衛門妻	飛	増田	門和左	53	女	5	乳癌	右	45		1868	慶応	4	1	23	不破為信
90	83 又八妻	尾		西萩原	42	女	5	臍上瘤		70		1868	慶応	4	2	13	不破為信
91	84 孫十郎妻	濃	郡上	落部	49	女	5	乳癌		60		1868	慶応	4	4	1	不破為信
92	85 金十郎妻	濃	厚見	池ノ上	49	女	3	乳癌	左	40		1868	慶応	4	4	1	不破為信惟治
93	45 多岐屋清六妻	濃	(大垣)	伝馬町		女		乳癌(3 ⁺)		27		1868	慶応	4	4	3	不破為信
94	54 小栗太郎兵衛	尾	知多郡	下半田				乳癌(2 ⁻)		20		1868	慶応	4	4	6	不破為信
95	86 勝平妻	濃	中嶋	下浦	46	女	3	乳癌	左	50	腋(?)	1871	明治	4	6		不破為信

注1) 国の項では美濃、尾は尾張、三は三河、飛は飛騨、勢は伊勢、江は近江の国を表す。

注2) 郡の項での()内は城下町か、宿場町を表す。藩は藩名そのものを示した。

注3) 病名の項での()内は二度目、あるいは三度目の手術をその数で示した。

注4) 転移の項での腋は腋窩転移を示し、()の数は摘出腋窩核の重さを示す。重さの記載のないものは?を付けた。

注5) ○は内容不明のものである。

疾患は乳癌が六十四例と最も多く、残りの二十二例には頸部肉瘤四例、顔面肉瘤四例、鉄唇三例、膿血二例、足の骨疽あるいは脱疽二例、その他六例となっている。肉瘤には今でいう悪性肉腫も含まれていたであろう。

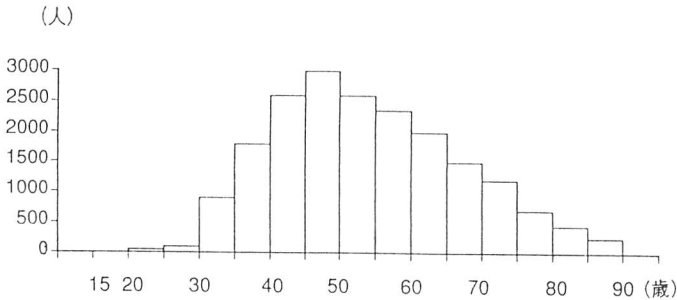
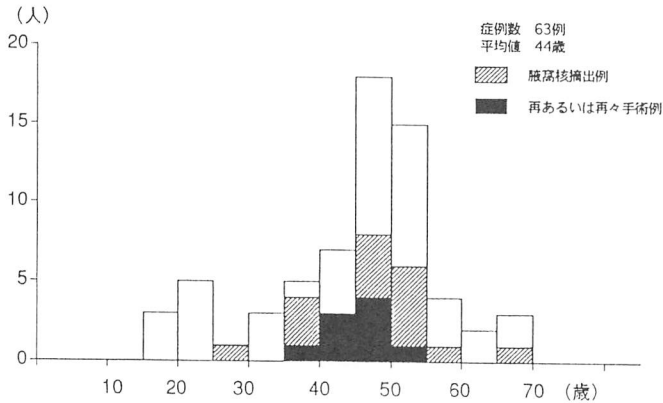


図1 乳癌手術患者の年齢分布

上段に本研究の、下段に1985年の日本における年齢階級別罹患数の分布を示す。両分布とも最頻階級は45歳代にあってそのパターンは比較的良好に似ているが、本研究では15歳から20歳前半にも1つのピークがある。再手術や再々手術例、腋窩核摘出例はいずれも20歳代後半からみられ、やはり最頻階級は45歳代である。

四一三 月別手術数

手術年月日のわかっている九十二例で月別に手術数を求めると、一月五件、二月六件、三月十五件、四月十三件、五月十二件、六月十件、七月七件、八月八件、九月六件、十月五件、十一月および十二月はそれぞれ二件ずつであり、三月から六月に多く、十一月、十二月は極めて少なかった。

四一四 乳癌について

乳癌六十三例の年齢分布(年齢の不明な八番の症例は除く)は十五歳から六十八歳までで、平均四十四歳であった(図1)。これを一九八五年の日本における乳がん年齢階級別罹患数の分布と比較してみると、両分布とも最頻階級は四十五歳代にあつてそのパターンは比較的よく似ているが、本研究での手術例で十五歳から二十歳前半に一つのピークがあるのは注目される。

罹患期間は記載のないものや年来というあいまいな表現のものもあつたが、年数の記載されたものとみると、二年から十年で、平均四・三年であつた。左右別でみると右の乳房二十七例、左二十六例、不明十一例であつた。腫瘤の重さ(二度目、三度目の手術は除く)は五錢(十八・七グラム)から一八〇錢(六七二・四グラム)とばらついたが、平均三十七・一錢(一三八・四グラム)であつた(但し一錢を三・七三グラムで換算)。右側腫瘤の平均は三七・九錢(二四一・四グラム)、左側のそれは三九・二錢(一四六・二グラム)であつた。腋窩リンパ核切除例は七十三例中二十例(二十七パーセント)であつた。乳癌と腋窩核の摘出の例を図2に示す。

再手術、再々手術例についてみると、再手術例は五症例(十五、三十八、五十一、五十九、六十五番)、再々手術例は二症例(四十七、四十八番)あつて、六十四例中十一パーセントと比較的多かつた。この内、二度目の手術までの期間の短いものは五十一番の三か月、長いものは五十九番の三年であつた。最初の手術から三度目までの期間は四十七番は九か月と短く、四十八番では五年一か月と長かつた。父廉齋の手術例は一例で、他の六例は息子の杏齋の症例であつた。

四一五 手術の説明について

乳癌の手術記録には、症例によつては手術の適否が述べられているものがある(図3)。つまり、自らの経験から、手術によつて治るものと治らぬ難治の症のものとを判断し、再患の危険性のある治らぬものについては固辞するが、死活は天の定めるところでもあり、患者本人や親類があまりに懇求するのでやむを得ず行ふという考え方である。ここにはすでに乳癌の手術の適否を判断していること、手術について詳細に説明していることがうかがわれ、興味深い。この様な症例は十五、二十三、二十八、三十八、七十番の五例にみられ、この内十五、三十八番の二例は再発し、二度目の手術を行っている。

手術記録は残存していないが、自分の医師としての経歴、患者への説明、手術への考え方などを記載した記録を図4に示す。読み方は以下のようなようになるかと思われる。

「加納驛葛屋久四郎なる者の妻、年四十余年なり。乳癌を患ふこと十有余年也。来りて治療を請う。予之を視るに、癌頭腐爛して既に醜花を作す。其の処小瘰の如し。予、病家に諭して曰う。夫れ乳癌の患為る也。服薬針灸、並びに功無き也。固より是れ和漢の先哲、治を言う有る者無し。而して近世、或は服薬を投じて、妄りに治を言う者有り。是れ盲者の瞎馬に騎りて、半夜、深池に臨む如し。豈に害を致さざらんや。茲に吾が青洲華岡先生は、自ら先賢の未だ発せざるの治術を發明す。以来、其の門に到りて治を請う者、蓋し歳に十を以つて等う。而して未だ嘗つて治らざる者有らざる也。然りと雖も其の腐潰の証に至る者は断乎として治療を辞す。況んや醜花するものに於てをや。其の故は何ぞや、腐潰醜花之証に中るものは、蓋し毒散漫して胸骨に附着す。故に幸いに治療を得ると雖も、然れども必ず再発の患有り。是れ自然の勢、然らざるを得ざる也。縦使偶たま再患せざる者有るとも、是は病者の洪福にして、醫の功に非ざる也。病家 或は不察其の再患の時に至りて、往々、罪を医術の拙に帰する故耳。然りと雖も、治療を施さざれば、則ち精神の日々に虚脱に就く。再患の難有ると雖も、居て其の斃を待つと、寧人事を尽くして天命を待つとの愈れると孰興。予、



図2 乳癌および腋窩核摘出の手術記録

23番の症例である。乳癌および腋窩核の摘出を1つの切り口で行っている。このような手術所見は華岡青洲の手術記録にも本間玄調のそれにもみられない。

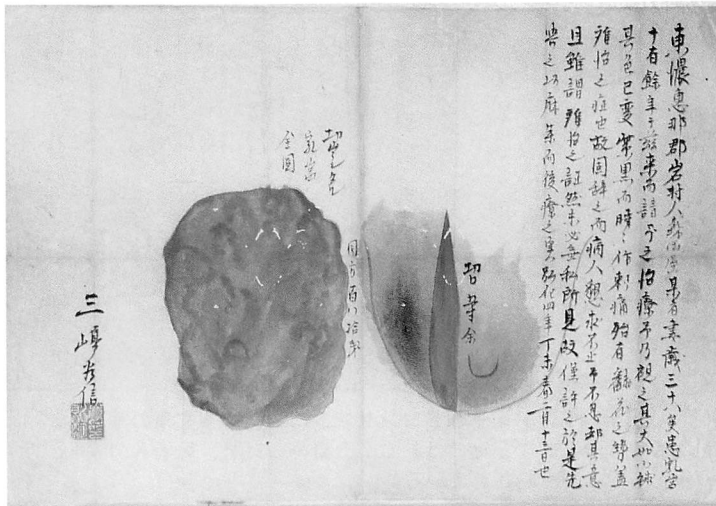


図3 乳癌の手術記録

15番目の症例である。難治の症と診断し、手術を固辞したが、患者の強い要請で乳癌腫瘍剔出術を行う。1年数か月後に再患し、再度手術(18番)を受けている。

加納驛舊屋久四郎者毒年四十余矣患乳竈十有餘年也其
 請治瘡予視之當頭腐爛既作翫花其久如小毳子論病
 家曰夫乳竈之為患也服藥針灸皆無功也固是和漢先哲
 無有言治者蓋而近世或有投服藥而毒言治者是如盲者
 騎瞎馬而深夜臨深池豈不致害哉茲吾昔洲善星先生者
 自登明先賢未奈之治術以來到于其門而請治者蓋歲以
 十輩而未嘗不治者也雖然至其腐爛証者斷乎辭治瘡
 况欲翫花乎其故何也腐爛翫花之証者蓋毒散蔓而附者
 故胸滑故魚骨得治瘡然必有再登之患是自然之勢不得
 不然也縱使偶有不再患者是病者之福福而非醫之功也病
 家或不察之至其再患之時往之婦羅達術之拙故耳然不施
 治瘡則精神日就虛脫至有再患之難居待其斃孰與乎不
 人事而待之命之愈于遊于善星先生之門者年矣晝夜親之
 而畧得自術故不自量用麻藥而瘡之矣天保十年七月夏
 五月廿二日也至如其再患非子之罪云

図4 インフォームドコンセントに相当する文章の写真
 医師としての一方的な記録ではあるが、自分の経歴、患者への説明、手術
 への考え方などが記載されている。

華岡先生の門に遊び、年有り。昼夜 親灸して暑ぼその術を得たり。故不自ら量らずして麻薬を用いて之を療す。実に天保十年己亥夏五月廿二日也。至如其の再患、予の罪に非ずと言う。」

これはこの当時としては一種のインフォームドコンセントに近いものであろう。

五、考 察

青洲の乳癌手術患者数は『乳岩姓名録』によると、一六五名の内一五六名と思われる。本研究での不破為信二代の乳癌手術記録は七十三症例で、廉齋の三十一例、杏齋の四十二例の記録が残っている。単純に一年あたりの乳癌の平均手術頻度を求めると青洲が年五例、為信二代を通して年一・八例となる。杏齋だけでみると年四・七例となり、青洲の手術数に匹敵する。廉齋については天保の頃の記録がほとんどみられないし、この他にも記録の紛失した可能性も否定できないことを考えると(例えば図4の症例、葛屋久四郎妻については、手術記録はない)、さらに手術例数は増えると思われる、地方の個人医師としてはかなりの数にのぼる。

対象疾患は乳癌が全体の七十七パーセントと圧倒的に多いが、他には肉瘤などの腫瘍形成性疾患が多い。但しこれらの組織や良悪の区別は不明である。他に鉄唇が三例みられるが、その縫合や縮帯方法は青洲の方法に従っている。

乳癌六十三例の年齢分布と一九八五年の日本における年齢階級別乳癌罹患数の分布とを図1に示し、比較した。勿論、今と当時の年齢の数え方、手術数と罹患数、人口構成、平均寿命など諸々の違いがあつて単純に分布を比較することはできないが、両分布とも最頻階級は四十五歳代にあつてそのパターンが比較的よく似ていることは興味深い。

乳癌の診断については腫瘍が腐潰、翻花しているもの、胸骨に付着しているもの、腋窩に転移しているものは乳癌の証として診断しているが、乳房内の腫瘍のみのは診断根拠は示していない。図1に示した乳癌手術例の年齢分布をみると、十五歳から二十歳前半に一つのピークが認められるがこれはいわゆる乳癌とは異なった良性乳腺腫瘍(線維腺

腫?)も含まれていたのかもしれない⁽⁶⁾。再手術や再々手術例、腋窩核摘出例についての乳癌の診断はまず問題ないと思われるが、これらはいずれも二十歳代後半からみられ、やはり最頻階級は四十五歳代である。当時、青洲は乳癌と乳癌の鑑別については『乳岩弁証』と『乳巖弁』に詳しく述べているが、腫瘍としての良性・悪性の区別の概念はなかったようである。為信は、症例によつては、敢えて乳癌の証という診断根拠を示していることがあるので、このことは逆に良性のものの存在に気付いていたのかもしれないが、そのことにはどこにも触れられていない。

乳癌の手術適否についての判断はかなり慎重である。特に腫瘍が胸骨に付着しているものや、腐潰、翻花しているもの、腋窩に転移しているものは予後は悪く、手術の適応でないので固辞するが、そのことを説明しても患者がどうしても手術をしてほしいと希望すれば行つていたようである。また、腋窩に転移しているものは自信をもって乳癌と診断しており、十八番の症例(嘉永元年(一八四八)夏)から腋窩核の剔出も積極的に行つており、その症例は全体の二十七パーセントにも及ぶ。乳癌手術は基本的には腫瘍のみを剔出する、今でいう乳房温存の方法であつたが、二度目や三度目の手術ではすべて乳頭部も切除している。

この当時の乳癌生存率は不明であるが、外国では十七世紀頃の三年生存率が五から三十パーセントといわれている⁽⁷⁾。勿論この研究成果から手術を受けたものの生存率の計算はできないが、二度あるいは三度の手術をした患者七名で再手術した時点で生きているとして生存率を求めると、概算で一年は四十二パーセント、三年で二十九パーセント、五年で十四パーセントとなる。これはあくまでも計算上の数字である。

麻酔にはいずれの症例にも麻薬(麻沸湯)を用いており、麻酔法は師の青洲の方法に従つたのであろう。また術式も青洲のそれと同様な方法で行われたと思われるが、具体的な術式は記載されていない。これが当時の記述の習慣であつたのか、あるいはわざわざ詳細に記載せずに未熟な医師がまねることをふせいだのかは定かでない。

患者の分布は美濃、尾張に限らず、他州からも何例かみられ、その診療圏はかなり広く、為信父子の近隣諸国への評

判や影響力は高かったと思われる。また対象患者のほとんどは農村出身者であったが、武家の患者もみられるので、この頃藩医でも全身麻酔を用いて手術のできるものはきわめて少なかったことが推察される。

近年インフォームドコンセントが注目されている⁽⁸⁾。為信の手術記録には、医師の説明と患者の考えが医師によって記録されているのみで(図3、図4)、勿論患者の承諾の署名はない。ここでは、患者があまりに手術を請うので、手術を行うという立場であるが、青洲は乳癌の症例ではないが、すでに天保三年(一八三二)に、『療治一札之事』として「療治中にもし如何様の異変が生じて一言も申し分ご御座無く候」由の誓約を取っている⁽⁹⁾。同様な証文は安政二年(一八五五)の佐倉順天堂医院における『差上申証文の事』においても「御療治中、万々相果て候ても、聊かも御恨み申し上げ候筋、決して御座無く…」の誓約をとっている⁽¹⁰⁾。このように「死亡しても全く文句をいけません」の医師有利の証文は江戸末期から明治にかけてとられ、この状況が長く続くことになる。しかし今に比べて手術そのものの危険度が高く、成功率が低かったことを考えると、このことはその時代の考え方を反映しているのかもしれない。ただ証文をうるために、手術についてかなり詳しく説明をしていることがうかがわれ、医師が勝手に手術を強要し、行っていたとは考えられない⁽¹¹⁾。

さて、父から子への医業の引き継ぎであるが、症例三十八番および三十九番については廉齋と杏齋と両者が別々の用紙に記載している。父の廉齋は簡略して記載しているのに対し、嗣子の杏齋の所見は詳細である。医業を父から子に受け渡すという移行期に嗣子である杏齋がこれからは自分が行うという自覚が感じられて興味深い。

ここで不破家華岡流手術図の意義を考えてみたい。もともと青洲は永富独嘯庵の『漫遊雜記』や、杉田玄白の『瘍家大成』に筆写されたハイステルの挿絵「截乳岩図」の影響を受けて、乳癌の手術に取り組んだ⁽²⁾⁽¹¹⁾という。そして乳癌のみならず、いくつかの疾患の外科的手術法を確立し、その高弟本間玄調が発展させた。しかし青洲にも玄調にも再手術例や再々手術例の記録図や、図2に示したような乳癌と腋窩核摘出の記録図はほとんど残っていない。西洋においては古

くはドイツのスクルテタスマたはシュルテス (Johannes Scultetus または Schultes, 一五九五—一六四五) の著書『外科百科』には乳房の根元に十文字に太い支持糸を通したのち、一刀のもとに切断し、創を烙鉄によって焼灼止血するきわめてむごい乳房切断手術が掲載されている⁽⁶⁾。青洲の乳癌手術に強い影響を与えたというハイステル (Lorenz Heister, 一六八三—一七五八) も同様な手術を行っていたようである。一八四四年にはパンコスト (Joseph Pancoast, 一八〇五—一八八二) が乳癌切断及び腋窩リンパ節切除、一八五三年にはページェット (Sir James Paget, 一八一四—一八九九) が乳癌摘出術を行った。一八六七年にはモーア (Charles Hewitt Moore, 一八二二—一八七〇) が局所再発は腫瘍の見えない延伸部の取り残しで、癌組織にメスを触れず、全乳腺患側乳房リンパ節を一塊に切除すべきとの外科の原則を発表した。本格的に乳癌の手術が行われるのは一八九四 (明治二十七年) 年、ハルステッド (William Steward Halsted, 一八五二—一九二二) とマイヤ (Willy Meyer, 一八五八—一九三二) が根治的乳房切断術の基礎ともいうべき近代術式を発表してからである⁽⁶⁾。このことから考えると、江戸末期にすでに一地方で全身麻酔のもとに不破為信父子が乳癌とその腋窩核摘出、さらには再々手術までも行っていたことは世界的にみても極めて先進的、かつ驚くべきことでもある。

六、おわりに

青洲華岡流医師、不破為信則明 (廉齋) および不破為信惟治 (杏齋) の手術記録九十五枚を分析し、当時の手術の適応疾患、記載法、手術承諾書のことなどについて述べた。緊急時の対応、感染の問題、手術そのものの不成功例など、当時は今とは比べものにならない程、悪い条件であったと思われるが、美濃の一地方で親子二代にわたり、自ら手術を行なって乳癌などいくつかの難治といわれる疾患に対して治療にあたった為信二代の意志の強さに驚くと共に、これだけの手術記録を残していたことに感銘を覚える。今後このような記録が発見され華岡流手術や麻酔法普及⁽¹²⁾の状況がさらに分析されることを望みたい。

(この論文の要旨は、平成七年六月、第九十六回日本医史学会で発表した)

文献

- (1) 平野満「写本の識語による華岡流医学の普及の研究」『明治大学人文学研究所紀要』第三十六冊、一一八～一三四頁、一九九四(平成六年)
- (2) 吳 秀三『華岡青洲先生及其外科』、吐鳳堂書店、京都、一九二三(大正十二年)
- (3) 不破義信(華陽山人)『不破家回想録』二二一～二二八頁、岐阜、一九七九(昭和五十四年)
- (4) 茶屋悟郎『半田地域にみる幕末の村方医師―亀崎村医師願達留を中心として―』大日本印刷株式会社、一九七六(昭和五十一年)
- (5) 森本忠興『森本忠興教授の乳がん―早期発見と最新治療』三十四頁、主婦の友社、東京、一九九四(平成六年)
- (6) 安藤博『乳腺疾患の歴史―主に外科史を中心に―』一〇四頁、篠原出版株式会社、東京、一九九二(平成四年)
- (7) 三浦重人「乳房温存療法とQOL」『現代医学』四十二巻二号、二二一～二二六頁、一九九四(平成六年)
- (8) 山内一信「インフォームドコンセント」『名大医学部学友時報』五四二号三、八～十頁、一九九五(平成七年)
- (9) 『療治一札之事』和歌山医科大学麻酔学教室所蔵
- (10) 『差上申証文の事』国立佐倉歴史民俗博物館所蔵
- (11) 長門谷洋治『甦る華岡青洲』二頁、一九九四(平成六年)
- (12) 松木明知「華岡青洲の麻酔法の普及―福井における橋本左内による二手術例について―」『日本医史学雑誌』四〇巻一号、八二～八三頁、一九九四(平成六年)

(名古屋大学医学部附属病院医療情報部)
(不破 医院)

Analysis of Old Surgical Operation Records of the Drs. Ishin Fuwa Who Graduated from Hanaoka School of Medicine

by Kazunobu YAMAUCHI and Hiroshi FUWA

Ninety-five surgical records prepared by Dr. Ishin Rensai Fuwa from 1826 to 1859, and by his son, Dr. Ishin Kyouzai Fuwa, from 1860 to 1871, were analyzed. These two surgeons lived in Fuwaishiki Village in the Mino area and performed many surgical operations under general anesthesia more than a century ago. The former was one of the trainees of Dr. Seishu Hanaoka who had performed the first operation under general anesthesia by Mafutsusan in 1804.

Forty-eight patients were from the Mino area, and thirty-one from the Owari area ; the others were from the Ise, Mikawa and Oomi areas. Seventy-three of 95 operations were for breast cancer, four for neck tumor, four for facial tumor, three for cleft palate and so on. The ages of breast cancer patients ranged from 15 to 68 years (mean, 44 years), and 27 % of 73 patients had an operation for breast cancer with removal of axillary nodes. Even at that time, informed consent for surgery seemed to have been obtained when a cancer was at the advanced stage and recurrence was suspected. These records clarify the medical situation, especially with regard to surgery, in one district of the Mino area at the end of the Edo era before Western medicine had been introduced to Japan.